倫風宏話

感謝の気持ちで、喜んで進んではたらこう

上廣哲治

先日、就職指導をしている先生が、働くことに意欲を見せ、就職活動に熱心な学生がいる一方で、「仕事は嫌だけど、働かないわけにいかないから……」と就職に消極的な学生がいて心配だと話しておられました。確かにこの仕事をしたいと望み、希望の職に就ける人もいれば、何がしたいかわからず必要に迫られて働く人もいます。いずれにしても、社会で生きていくためには働かなければなりません。何らかの役割を担わなければ、生活していくことができない仕組みになっているからです。

夏目漱石は、「道楽と職業」という講演で、「職業というものは要するに人のためにするものだということに根本義をおかなければなりません。人のためにする結果が己のためになるのだから、元はどうしても他人本位である」と述べています。漱石によれば、「職業」あるいは「仕事」をさかのぼって考えると、生きるために必要なことをすべて一人でやっていた時代にいきつくといいます。

米を食べるなら、まず種を蒔き、育てて刈り取るところから始め、火を起こして調理しなければなりません。衣服を作り、木を伐って家を建て、そこに住む。生きるためにしなければならない多くの営みを、文明の発展とともに人々と分けて助け合ったのが、現在のさまざまな職業だというのです。仕事は、人間がこの世に生きることそのものなのです。ある職業に就いて働くことは、他の人々の暮らしの一部を支えることであり、翻って自分の生活を支えることでもあるのです。だから漱石は、働くことは第一義に人のためであり、また自分のためであると主張するのです。そこには人と人とが支え合わなければ生きられない現実があります。私たちはこのような支え合いの中で、多くの人々に助けられて生かされているのです。わが会ではそれを「社会の恩」といっています。

もうおわかりでしょう。今月は「働き」、その中でも「朝の誓」にある「三つの恩を忘れず　喜んで進んではたらきます」という「喜働」について考えます。人間は一人だけでは生きていけません。見えないところで、さまざまな人々の恩を受けています。喜働は、その恩を思い起こし、それを忘れずに、何事もいやがらずに喜びをもって進んで働こうということです。では、喜働を支える「三つの恩」とは何でしょうか。言うまでもなく、「親の恩」「師の恩」「社会の恩」のことです。

私たちがこの世にあるのは、親が命を授けてくださったからです。しかし、ひとつの命は一組の親だけが授けてくれたものではありません。親の命はその親から与えられ、その親の命もまたさらにその親から授かったものです。自分の命は、このように多くの命を受け継いで、その果てにあるのです。「親の恩」というのは、このように命を生みだし、はるかな時間を引き継いできたものへの感謝なのです。

同じように「師の恩」も、学校の先生や両親などだけでなく、広く人類の叡知を築いた多くの哲人、偉人たち、さらに生きとし生けるもの、大自然のことです。このように考えると、私たちが受けた「恩」のいかに大きく、深いものであるかが実感されるでしょう。「三つの恩」を心に刻み、感謝するがゆえ

に、それに報いるために「喜んで進んではたらこう」ということになるのです。

とは言っても、仕事は楽しいことばかりではありません。むしろ辛いことのほうが多いでしょう。希望の仕事に就けた人でも、喜んで働いているときだけではありません。好きな仕事だから耐えることができる、と思うときもあるのではないでしょうか。まして必要に迫られて働いている人は、いっそう仕事の厳しさが身に染みるはずです。

しかし辛くてもなお、私たちは「喜んで進んで」働かなければなりません。働くことは恩に対する感謝の気持ちを表すことだからです。お礼を言うときに、ぞんざいな口調で言ったのではお礼にはなりません。三つの恩を思い、感謝の気持ちをよみがえらせてください。とりわけ人々がいやがる仕事を「喜んで進んでする」ことができれば、それこそ尊い感謝の気持ちの表れとなるでしょう。

いかなる仕事でもあえて喜び進んで働くことで、やる気が湧いてきます。『実践倫理講座・天の巻』には、「やむをえない労働だと考えて受動的に働く場合と、喜んで進んで働く場合とでは、明らかに仕事の質と量が違ってきます」とあります。辛い仕事という捉え方を変えて、自己成長のための大切な仕事であると思いさだめ、喜んで進んで働いてみてください。不思議なことに意欲が高まるはずです。

やらされているのではない、自ら喜んで進んでやっているのだという意識は、働くことで生まれる真の喜びを導き出し、志気を一層高めます。すると、成果が上がり、成果を出せば周りの評価も高まります。こうして周囲の信頼を得て、もし望むなら成功への道を歩み始めることも不可能ではありません。

「喜働」が人を成功に導く教えであるといわれるのは、こうした理由からなのです。

曹洞宗の開祖・道元禅師の名は皆さんもご存じでしょう。禅師が中国の天童山で修行をしていたとき、腰が曲がり眉も真っ白な一人の食事係の僧が、太陽の照りつける昼下がりに、笠もかぶらず竹の杖を突きながら一心不乱に海藻を干していました。

いかにも辛そうに見えましたので、道元禅師は思わず「お年なのですから若い僧にやらせたらいかがですか」と言いますと、老僧は「これは私の仕事です」と答えました。「涼しくなってからなさったらいかがでしょう」と言うと、「今を外していつやれというのかね」と答えます。自分にまかされた仕事は、自分の仕事としてその時を逃さずにきちんと果たす。老僧はそう言ったのです。

修行僧の務めは悟りを開くために坐禅修行をすることです。では、それ以外の時間は無駄な時間なのでしょうか。道元禅師は、食事係の老僧の言葉から「坐禅」だけが修行ではない、日々の雑務も立派な修行であることに気づいたといわれます。働くことは自分を高めるひとつの修行なのです。

「学校で学んだことは社会に出てあまり役立たなかったけれど、仕事ではいろいろなことを学ばせてもらった」という方がいます。勉強は、多くの知識を得ることができ、役にも立ちますが、それは実践で学んだ知識とはちがいます。いわば机上の知識です。しかし仕事は、学ぶ意欲さえあれば、働くことがそのまま生きた学びとなり、経験がそのまま身につきます。その道一筋の職人さんなどの顔に、自信と思慮深さが宿っているのは仕事でついた力なのです。

さて今月の実践課題です。社員教育にトイレ掃除をさせる会社があります。人のいやがる仕事をすることで、働く力を養うためです。実践力をつけるため、あなたも、人の避けたがる仕事を、あえて喜んで進んでやってみませんか。誰かがやらなければならないのです。だとするならば、「朝の誓」に生きる私たちこそ、率先して実践すべき課題ではないでしょうか。